

# 記 録

RECORDING

NUMBER

no. 3

DATE

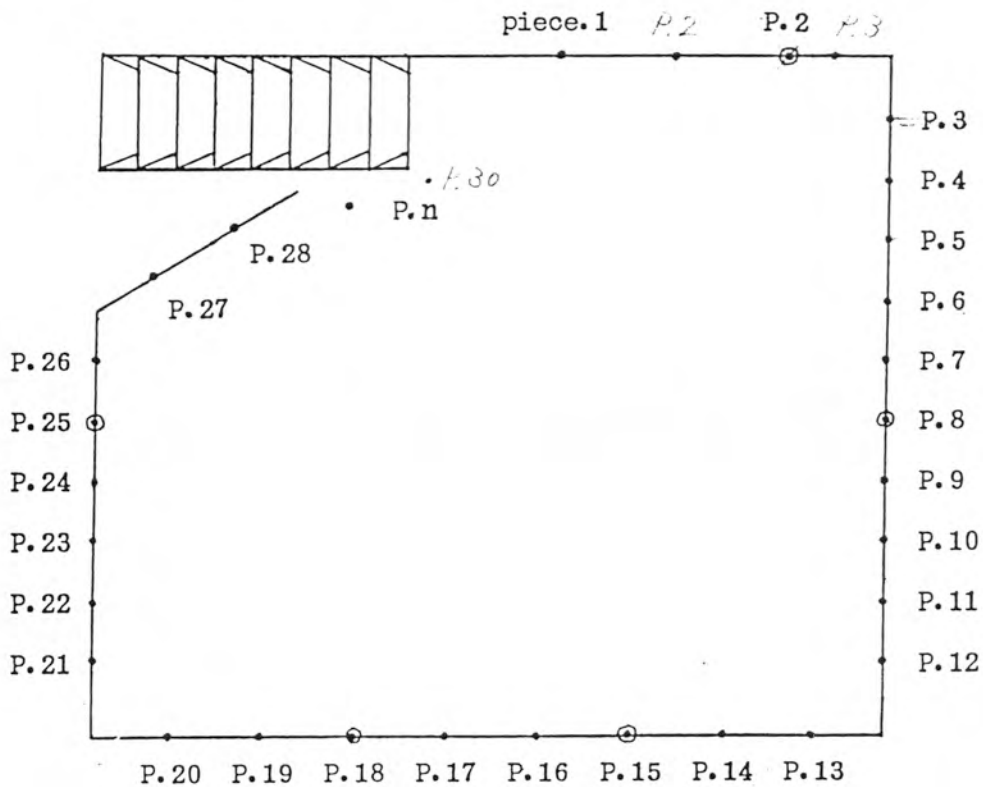
1983. 9. 20. (TUE) ~ 9. 25. (SUN)  
(12:00 ~ 7:30)

PLACE

KIYAMACHI GARO

(KYOTO KIYAMACHIDORI SHIJYO AGARU HIGASHI)

SETTING



piece. 1	.....	記録
P.2 P.3 P.4	.....	交感
P.5 P.6 P.7	.....	影. 1
P.8 P.25	.....	Eye
P.9 P.10 P.11 P.12	.....	Veil
P.13 P.14 P.15 P.16 P.17 P.18 P.19 P.20	.....	表面
P.21 P.22 P.23 P.24	.....	のぞきこむ
P.26 P.30	.....	誰もいないテニスコート
P.27	.....	PIECE
P.28	.....	.....

RECORDER

MIHOKO KOSUGI AND YASUHIKO ANDO

記録

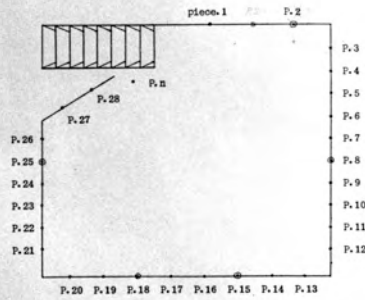
RECORDING  
NUMBER

no. 3

DATE 1983.9.20. (TUE) ~ 9.25. (SUN)  
(12:00 ~ 7:30)

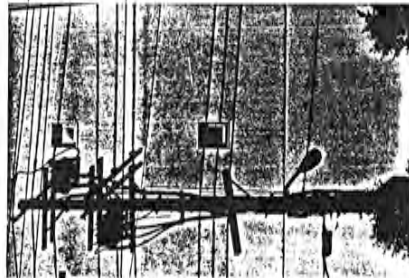
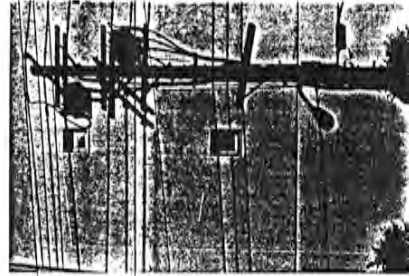
PLACE KIYAMACHI GARO  
(KYOTO KIYAMACHIDORI SHIJYO AGARU HIGASHI)

SETTING



piece.1 ..... 記録  
P.2 P.3 P.4 ..... 交感  
P.5 P.6 P.7 ..... 影, 1  
P.8 P.25 ..... Eye  
P.9 P.10 P.11 P.12 ..... Bell  
P.13 P.14 P.15 P.16 P.17 P.18 P.19 P.20 ..... 楽園  
P.21 P.22 P.23 P.24 ..... のぞきこむ  
P.26 ..... 誰もいないスコート  
P.27 ..... PIECE  
P.28 .....

RECORDER MIHOKO KOSUGI AND YASUHIKO ANDO



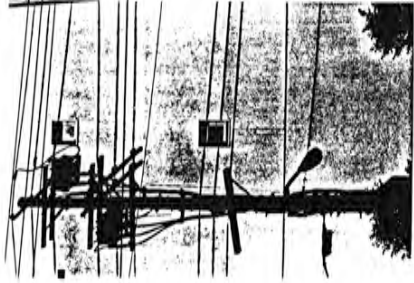
記録は、ひとつの鳥を「記録」を要する。それは、所定同じく、餌の供給部から入ってくる。記録は、鳥自身の身の中で、また他者の中で、ひとつの鳥が打つてくることを要する。

鳥の鳴き声の記録

鳥の鳴き声の記録

鳥の鳴き声の記録

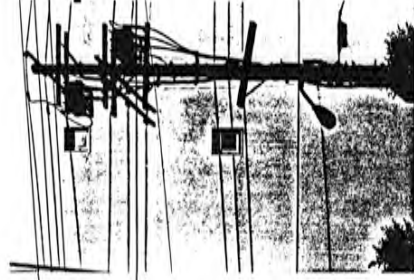
鳥の鳴き声の記録



moi



je

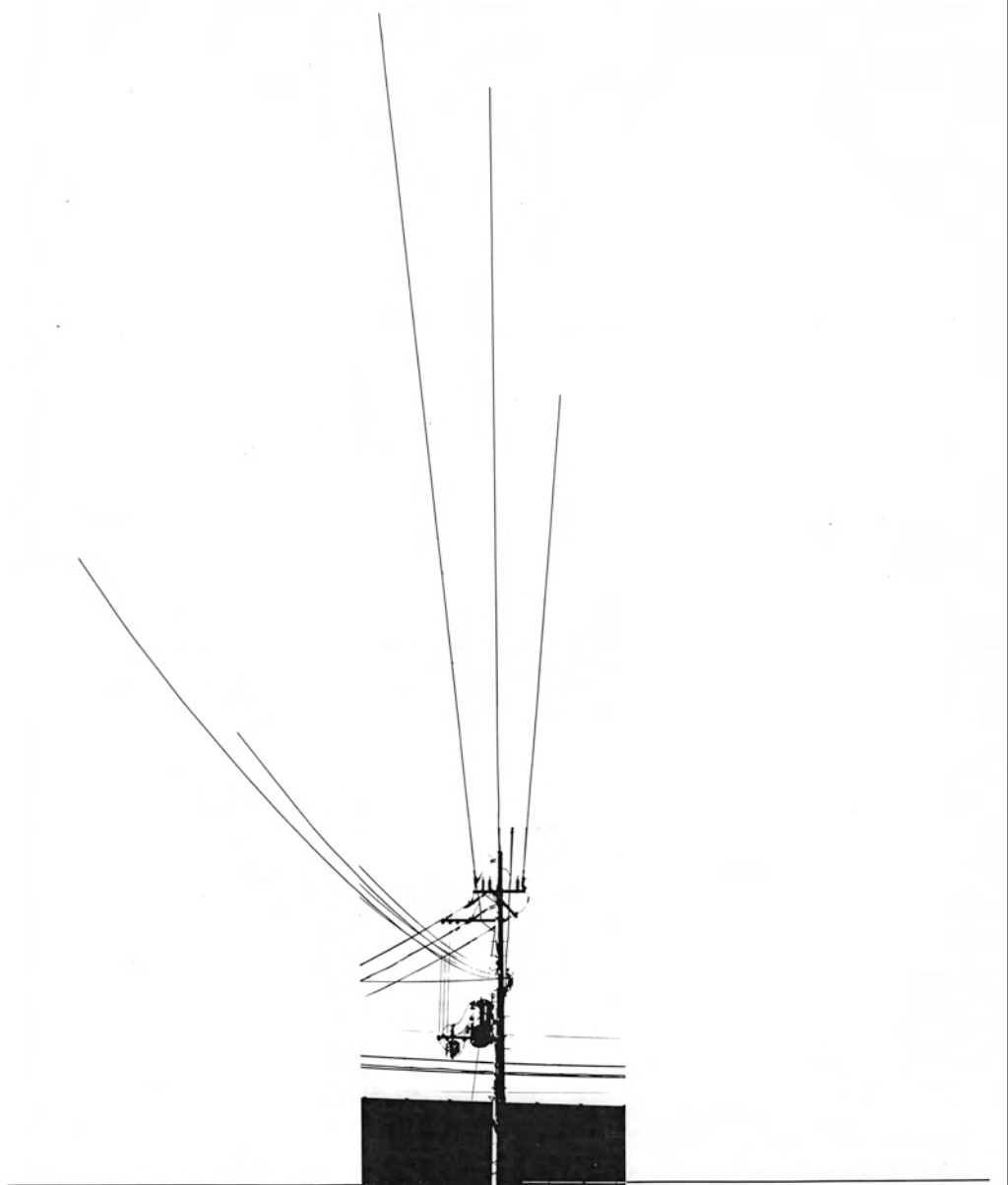


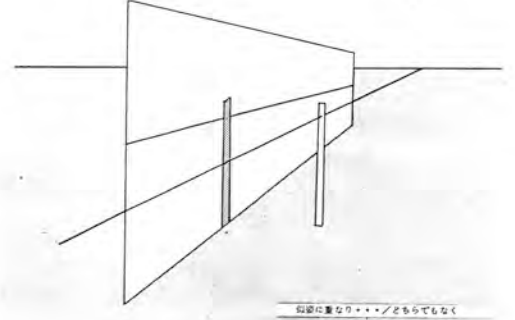
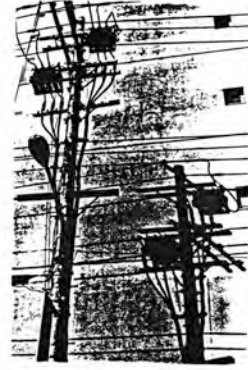
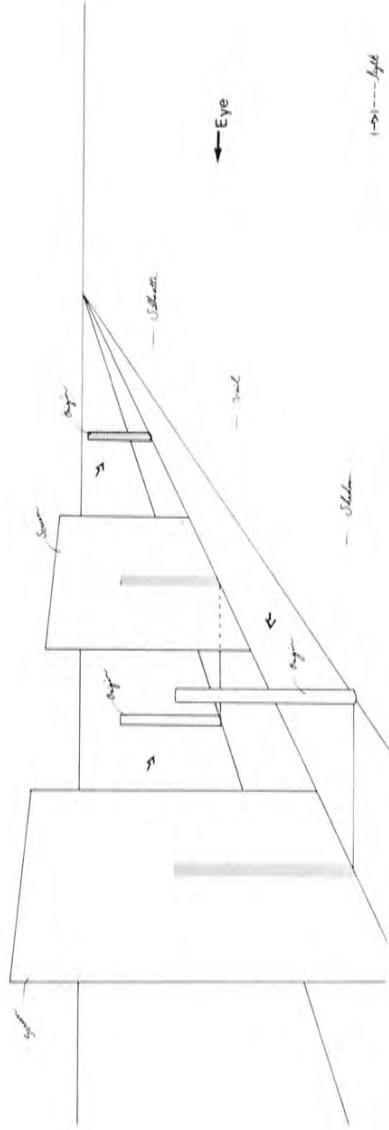
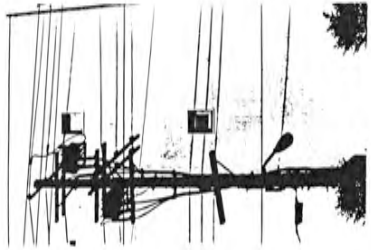
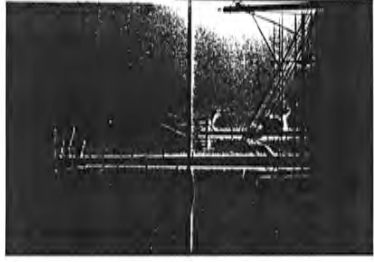
moi

..... 通っていますか、他の私に話す すると、関係の決定的な中絶が、甚るしく他の言葉のなかで、無限の形体として返すというたとえ  
 私が他に話すとき、私を他に結びつける言葉は、あの田外を距離を——死に多くことが不可能性を助ける響にかいて、死に多くことの無限  
 の動きが、そりてあるところの、あの田外を距離を——「もしよければ」「戻る」のです。そして、死自身、他に返しつつ、死に多く代りに、響て、返  
 しているのです。言葉えれば、私は、死に多く響返のあることの響にかいて、返しているのです。



かか このさまより空の  
 心やさしい聲、別れながら  
 ぼくは きみのうちに落ちこむ きみは ぼくのうちに  
 落ちこむ.....



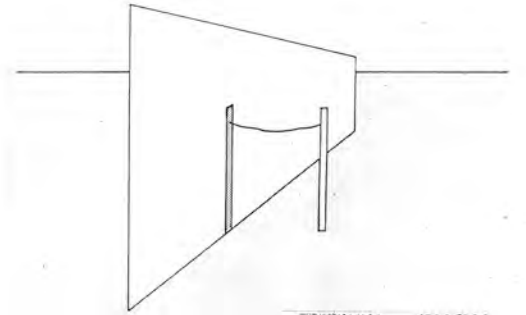
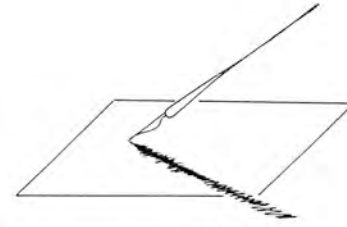


影の描き方... / 2005年

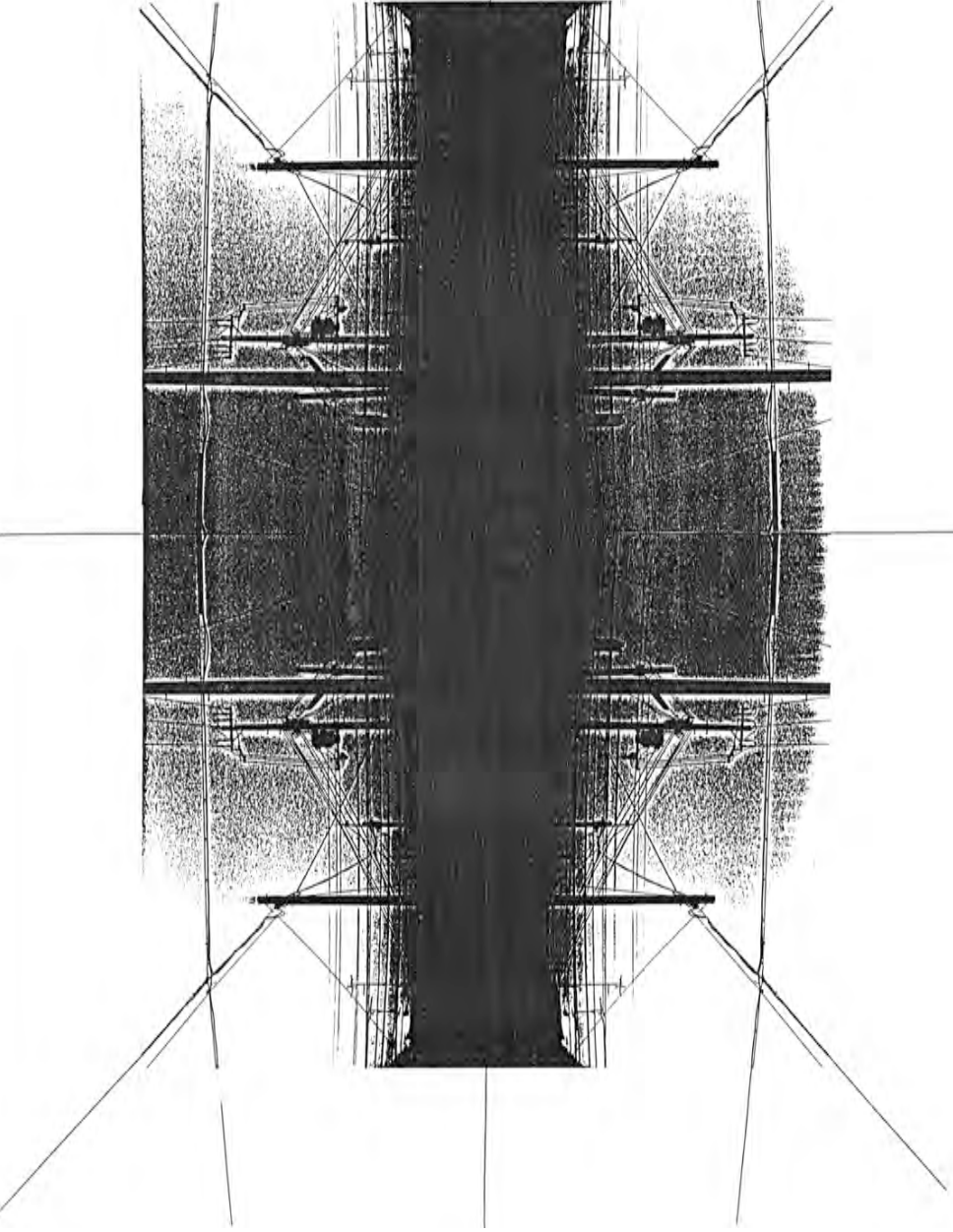
*separated from the shadow*

*to touch the shadow*

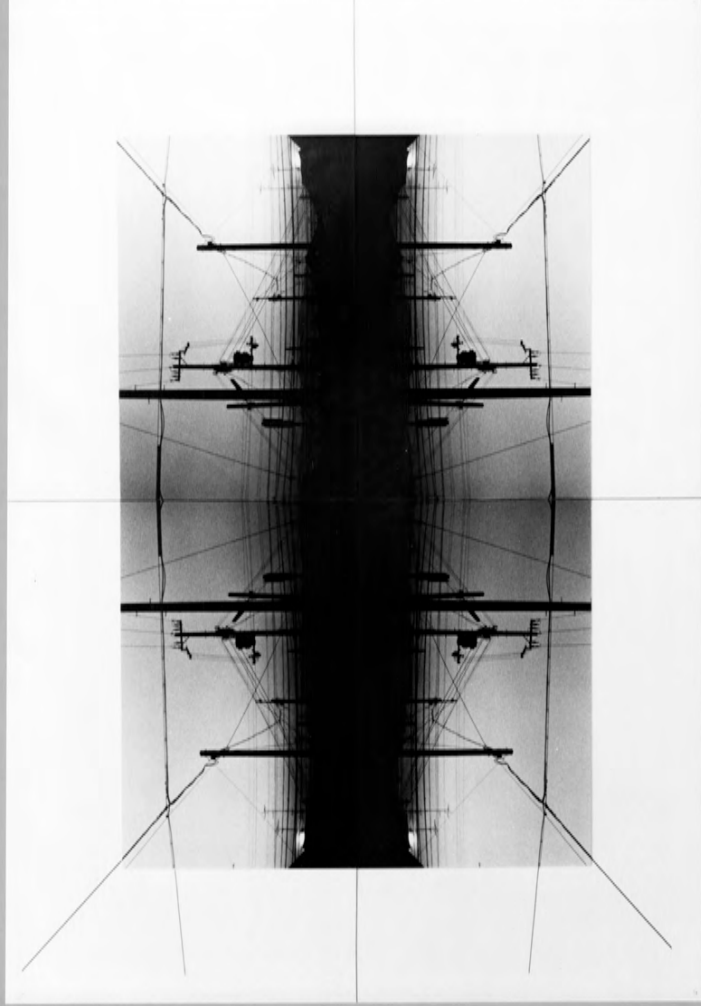
*drawing a line  
(shadow of line?)*



影の描き方... / 2005年



P. 6 - B. 1



P. 8 - B. 1 (photo)



Veil/影

Veil

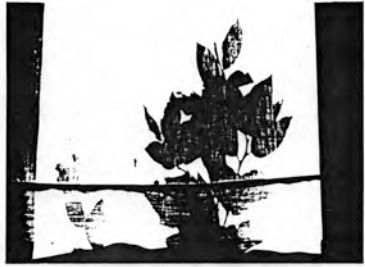
影

Veil/影

視線/眼ざし

Pile ... 写真 紙片

re-Quote ( Quote - Unquote )



はら見てごらん  
あんなに くっきりと木の影

影? これは...

( 布が織りこんだ葉い )

あれは 影であることを忘れさせる

( 影であることを失った影 )

向う側には あるのかしら 木が

( 見ているのは影で 影だけであり  
向う側に木があるのかどうかは 知ることがない )

思うことができるだけ

向う側に木がないのなら  
そこには 何があるの?

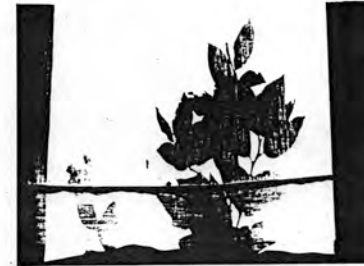
視線は、Veilから影を透さける。

あの見慣れた木の方へではなく  
影の影 (イマージュ) へと。

Veil一糸の透ざかりの内にとらえられた  
影の影 (イマージュ)

影が見せる布の織り目は、影を透ざけつつ、Veilと化し。

そこには、影の影 (イマージュ) だけが...  
— Veilに織り込まれ? Veilに織り込まれ。  
— Veilの外に? Veilの外に。



あれは影なんだろうか... それとも Veil (布) の葉いなのか  
... あの影を穿ったVeil (布) の向う側には 強もなく  
また もう一枚 影を映すと見せるVeilが あったとしたら...  
— あなたは それも引くでしょう  
もう一枚 向う側にVeilがあったとしても  
いや あれば いいね。何度もVeilを引いていく。  
引いても また そこにVeilがあれば... ありさえすれば  
いつも ある距離を 持ち続けられる...  
— Veilの中に のみこまれても?  
ええ... Veilの中で まだあなたは  
ある距離を、向う側を想って 想い続けられる  
...でも...もしも  
もしも Veilの向う側に  
何もあはししないと 想ってしまったら...  
— Veilは 何を覆いかくしているの?  
いえ、Veilがあることで想ってしまう...  
Veil・覆い...何を覆ってはいようと  
一枚の覆い-Veilが見えること  
...見てしまうこと... ..

あれは影なんだろうか... それとも Veil (布) の葉いなのか  
あれが ただの影なら 向う側は あるに違いない。  
はら 葉かな ざわめき...  
あのVeilを 引いてもいいね、あんなに外は 日差しで いっぱいだ...  
—でも 影でないかも しれない。  
どうして それが そんな思いが  
こんなに わたしを脅かすのだろうか  
もしも...  
もしも... Veil (布) の葉いだったら 向う側は あるんだろうか  
— 壁なら いいのね 白い壁なら  
壁なら...まだ いいのか?... たぶん...  
じゃ あの ざわめきは... あれば...  
— あれば...そこにあるよ。  
わたしたちは 葉かな ざわめきの中に  
...でも もしも... ..





イメージは表象の二重性だ。暮きつつ覆りもの 暮くという語の両義的な  
 語 程のうちに覆いながしつづき 覆い それがイメージである。  
 イメージは この二重性にかいてイメージである。  
 それは対象の複写ではなく 初原的な二重化であり この二重化が次に事物が  
 比喩的に表わされることを可能にするのだ。



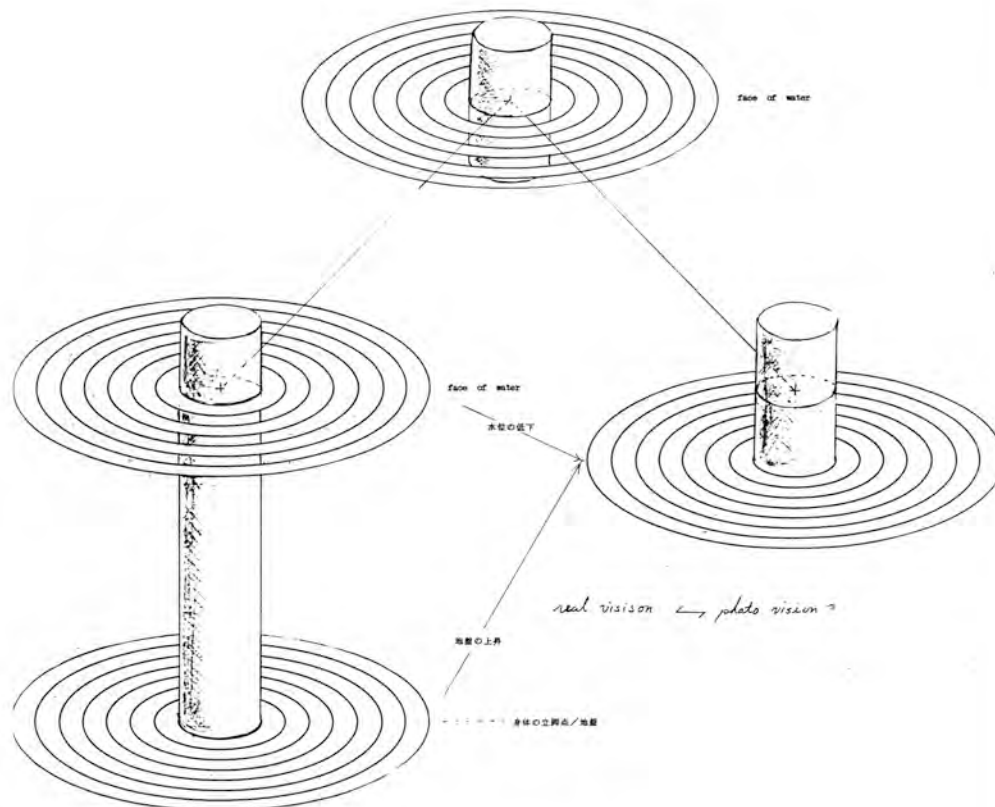
Veil・覆い

一枚のVeil・覆い

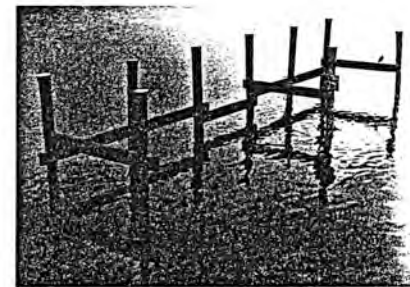
われわれに 死の影を夢想させる  
 この一枚のVeil・覆い

一枚のVeil・覆いから、われわれを遠く隔てさせる  
 ある距離

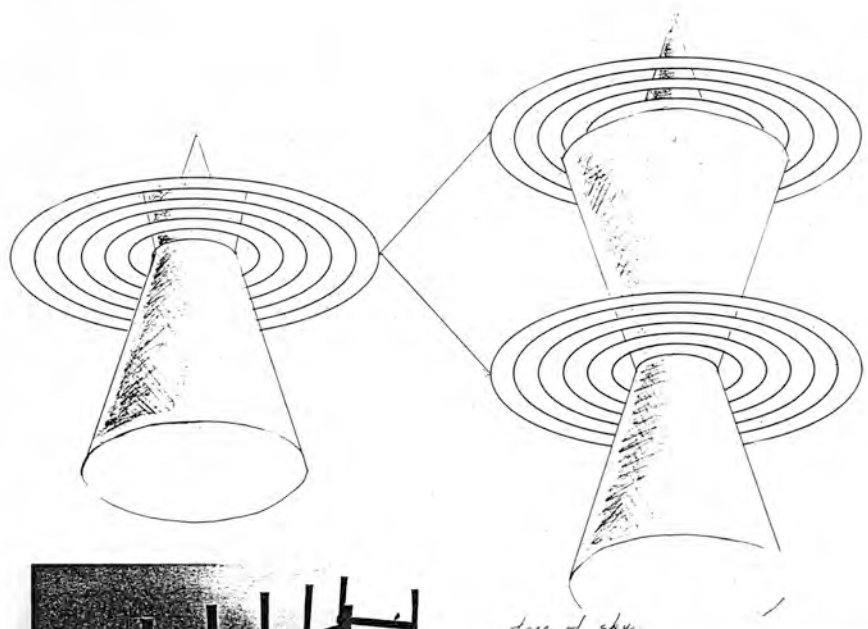
われわれに 死の影を夢想させる  
 この一枚のVeil・覆いから  
 われわれを遠く隔てさせる  
 ある距離



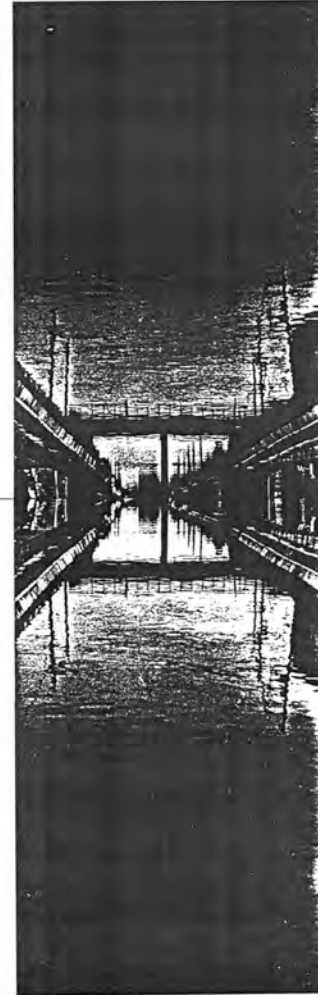
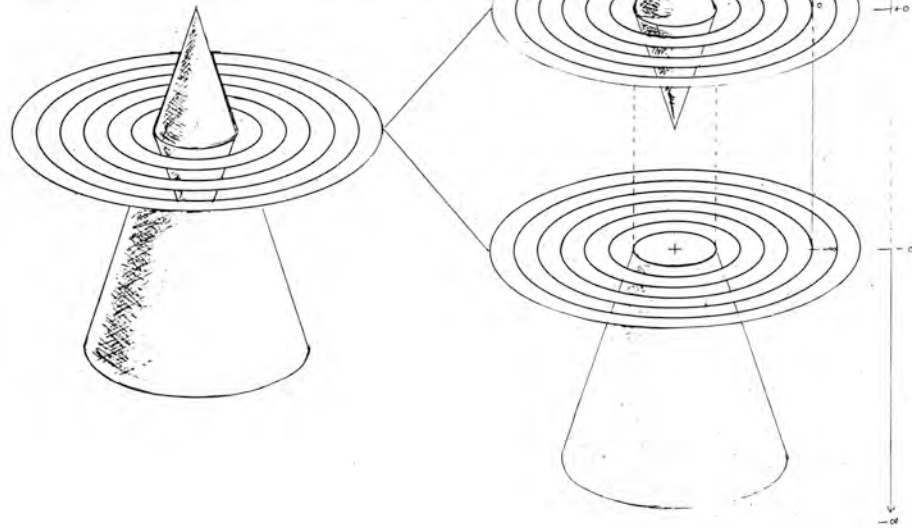
<すべて見えるものは見えないものである。知られるものは知られないものである。意識は 意識されぬ意識 (photosis: 知覚) にかいてあり、見るとは常に意識に見えぬ以上のことを見る (見えぬことまでも見る) ということである。>  
 私がこういつたからとて、それは意識の意識に解されてはならない。  
 ——またそれは次のように考えられてはならない。それは自己即身として完全な定義 (規定) された見えるものに対して、私がある見えないものを付加したのだ (ここでいう見えないものは対象性が欠如しているというだけのことである。即ち対象の存在性は満たした仕方として、別の場所にあるというだけのことである) > と、そうではなくそれは次のように理解されなければならない。不可視性を言ふのは可視性自体なのである。私が見る程度にまさか出列して、見ているものが何であるか知られる (再々意識しい人ほど定義 (規定) されなさいまじい) が、とういつたからとて <そこには何も見えないのだらう、ということではなく、私の「本質」 (being) は意識のうちには知られていない世界が自分自身の「本質」> ということである。知られる世界は (観念のよう) 私自身の身体と配線の全体なのであって、時間的空間的な個物の集まりなのではない——見えるものがつ見えぬものということなのだ。それは世界から隠せられる光の属性なのである。







face of sky  
face of sea



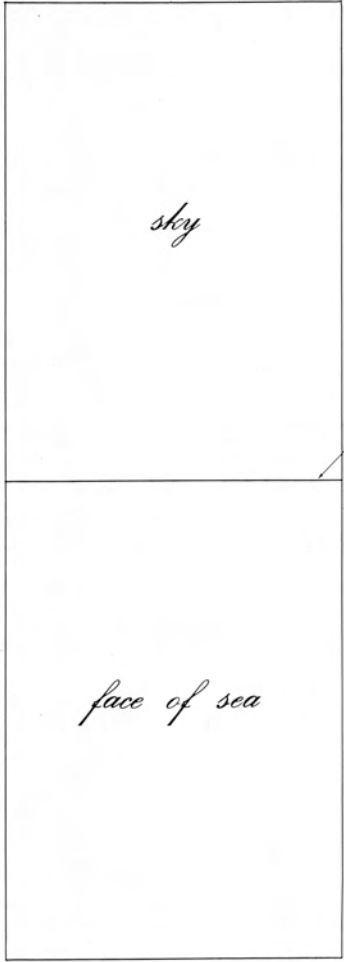


Fig. 1

OVER THE FACE OF SEA

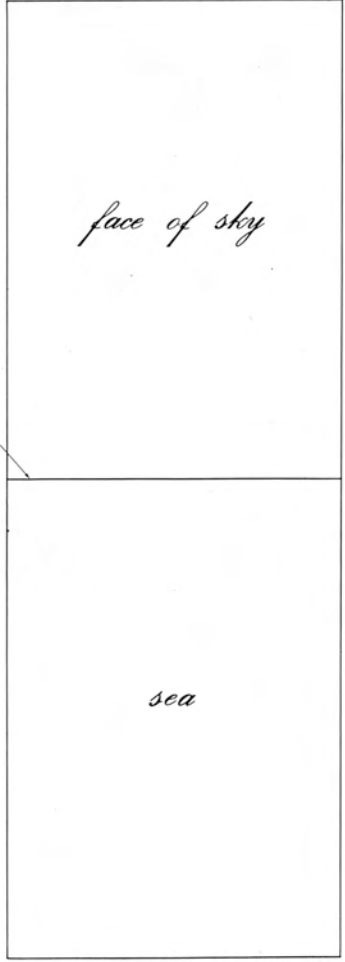


Fig. 2

UNDER THE FACE OF SKY

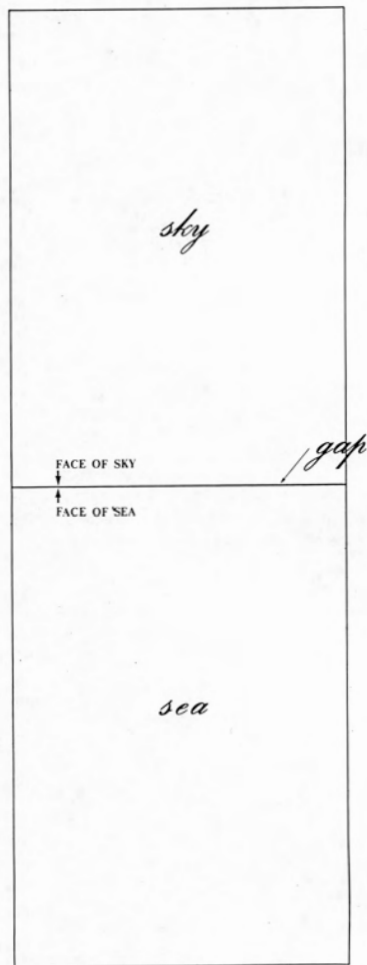


Fig. 3

FROM INSIDE OF  
REAL SPACE

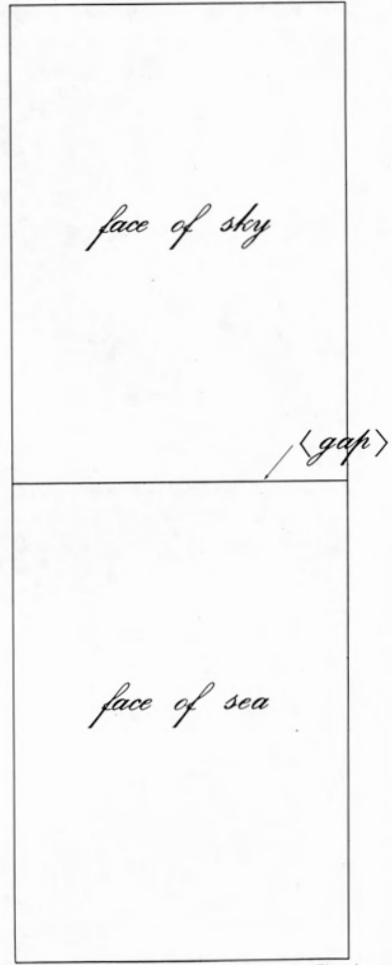


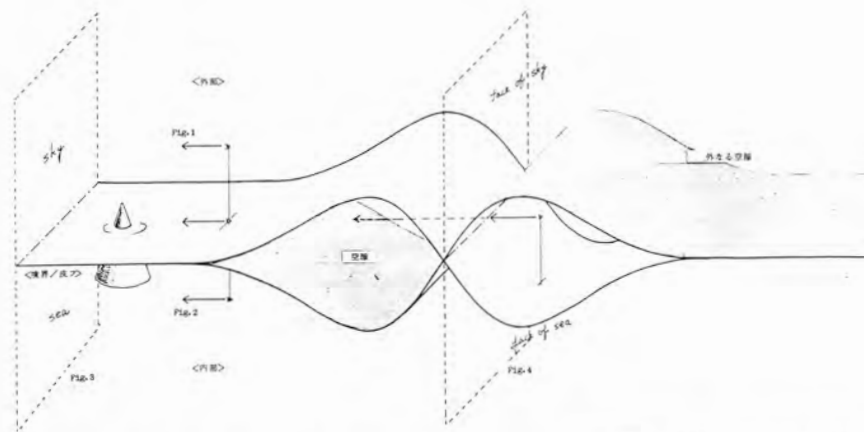
Fig. 4

FROM INSIDE OF  
<IMAGINAL>SPACE



次のように述べることは——〈奇妙なことであるが、身体とは見るものであり、それとは  
見る、身体は見るものだからというところから〉、とこの〈身体は見るものである〉  
と私がいう場合、真にいいかとは 〈身体は見る行為がいて見えてくるようなところ〉  
に近づく、または他者の視点から見るもの、ということである。またはこういってもいい  
——〈身体は、私にとっての鏡、または三階層の中で見るもの〉と。

私の身体は物ひとつに置き換えられ、ひとつの物である。私の身体は世界の真目のなかで存在  
を求めている。その観察力は物とそれを見る。しかし、私の身体は自分で見たり聞いたりする  
のだから、自分のまわりを物と見ているが、それらの物はいわば身体そのものの観察点から見て  
あって、その向うから観察され、真実の空を真実での身体の一部をなしている。  
したがって、世界は、自分から見る身体という状態で存在していることになるのだ。



生後まもない幼児は、母親の身体との接触やその温かさや呼吸などがふたたび自分の住む空  
もどくことを求めて、母親の住むところから逃げかきこぼす。スロップが「アナ  
ライズ(analysis)」と呼ぶこの呼びかけは、母親のなかでいたときの生の構成要素がいまこ  
こでは欠けていることを示している。とらえてこの呼びかけに応じた「じゃぶん」は  
母親がさした乳児はアナライズの呼びかけを受けとめる働きをするが、幼児  
の運動の遅れがこの境界点に落ちたとき、最初の乳児が幼児の顔からもれるわけである。  
いわば幼児の乳児や身体は、呼びかけが授けられる真実の空、真実の海、真実の目、真実の  
手である。幼児の呼びかけを素く受けとめてもてまわすことにより、運動の遅れをその  
くだける真実の中で取り戻せるのである。

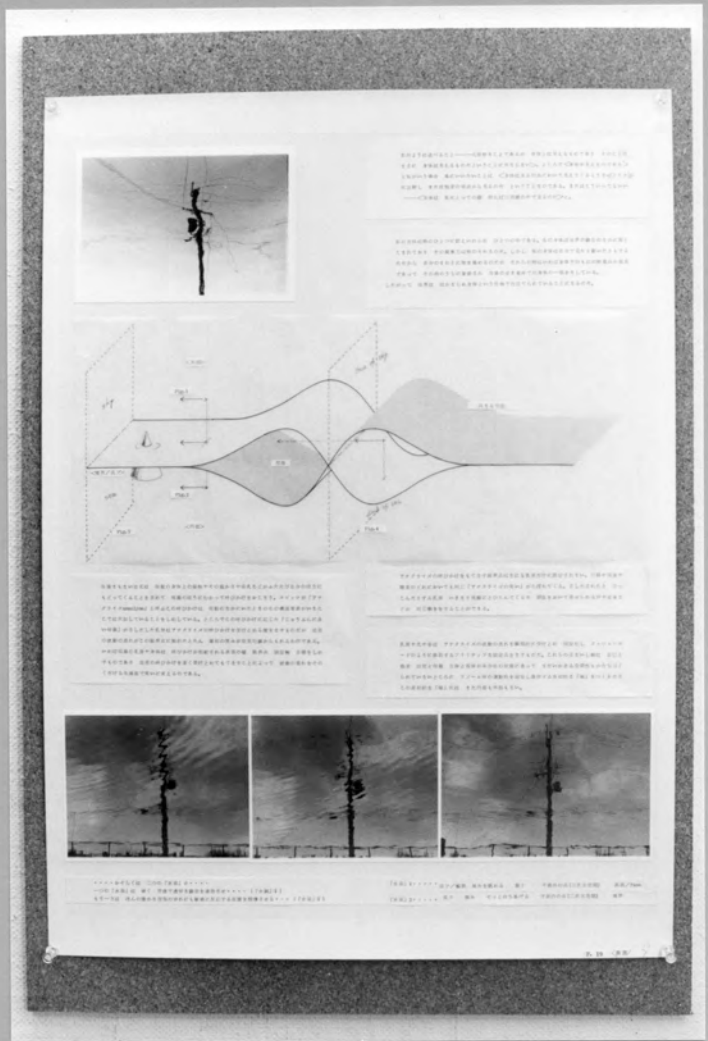
アナライズの呼びかけもまたその境界点には乳児だけが固定されない。口唇や呼吸や  
視覚の遅れにたいして同じ「アナライズの眼」が控えている。そして乳児は、口  
唇や呼吸や視覚、いきなり真実にとびこんでくる光、真実を聞いて受せられる声や言葉を  
どか、同じ働きをすることが出来る。

乳児や幼児は、アナライズの運動の遅れを真実の空と海、真実の目、真実の手、真実の  
口唇や呼吸や視覚の遅れにたいして同じ「アナライズの眼」が控えている。そして乳児は、口  
唇や呼吸や視覚、いきなり真実にとびこんでくる光、真実を聞いて受せられる声や言葉を  
どか、同じ働きをすることが出来る。

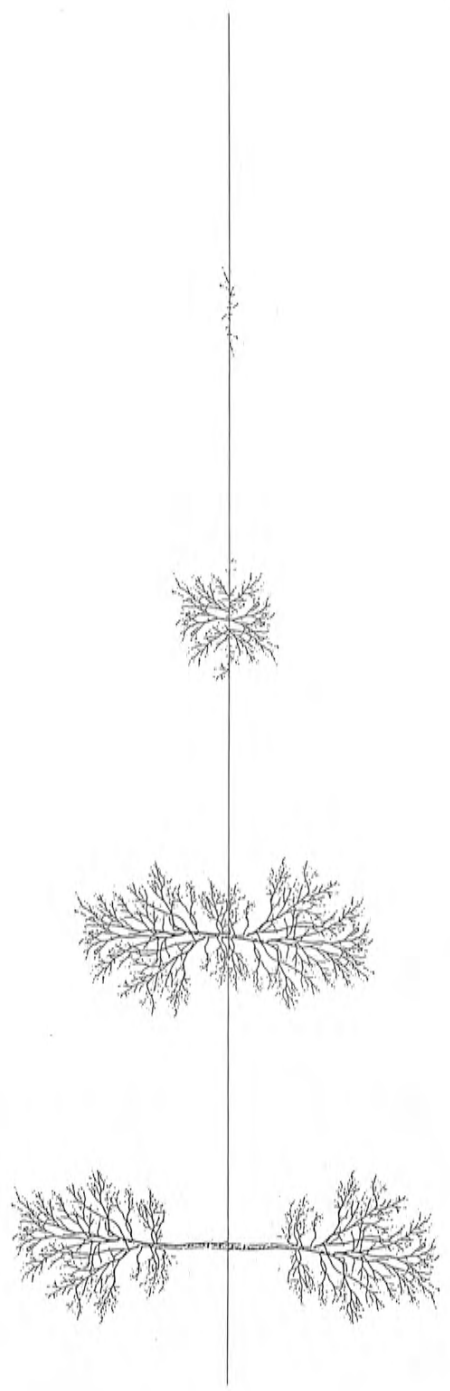


・・・かそれには、二つの「水面」が・・・  
一つの「水面」は、横く、空と海を透明な鏡面を通して・・・「水面1」  
もう一方は、柱の影が空気のゆらぎに揺れ動くように水面を揺らす・・・「水面2」

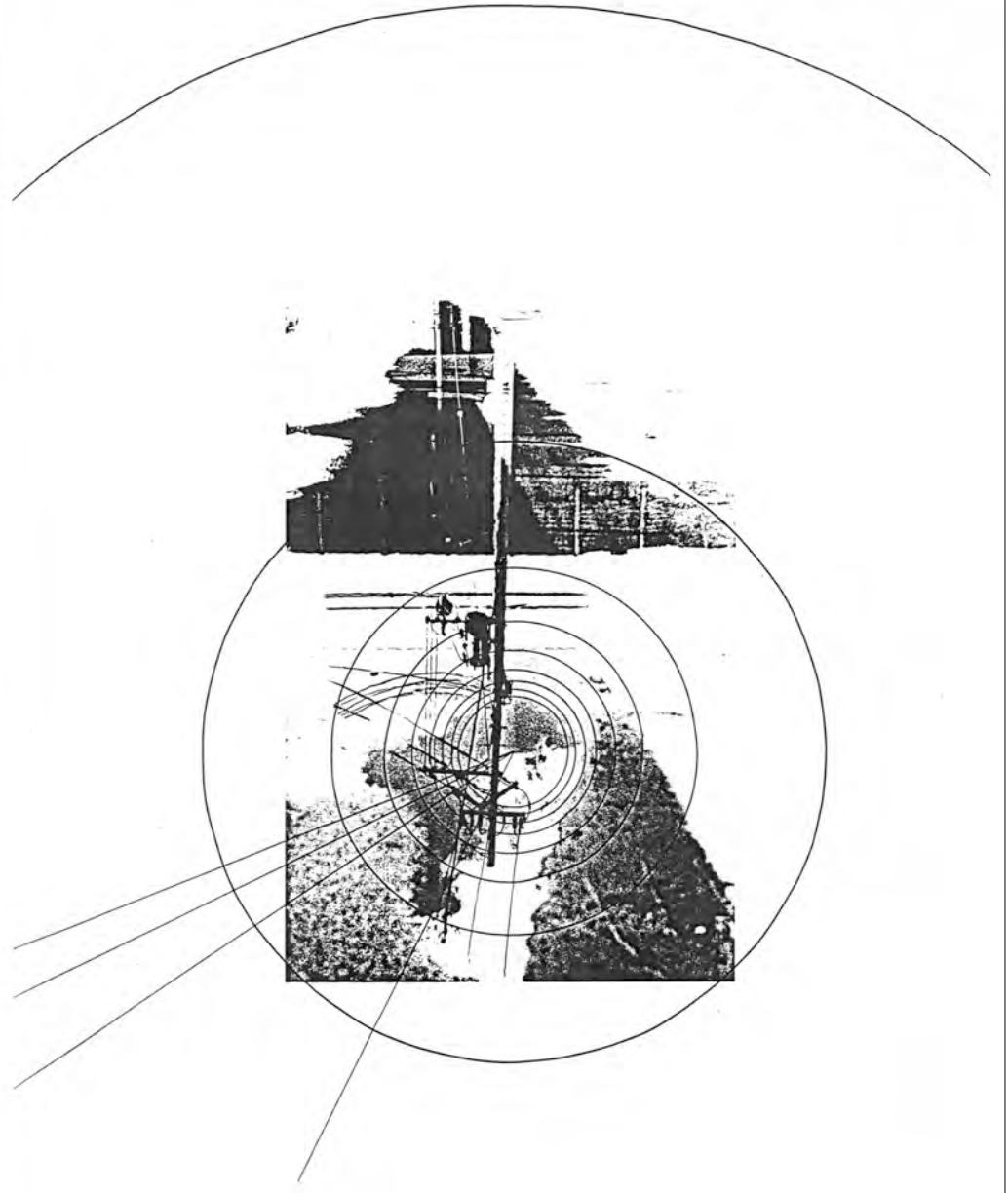
「水面1」・・・スロップの鏡、海を映し出す。空と海の間(三次元空間) 水面/1998  
「水面2」・・・空と海、そっと持ちあがる。空と海の間(二次元空間) 水面

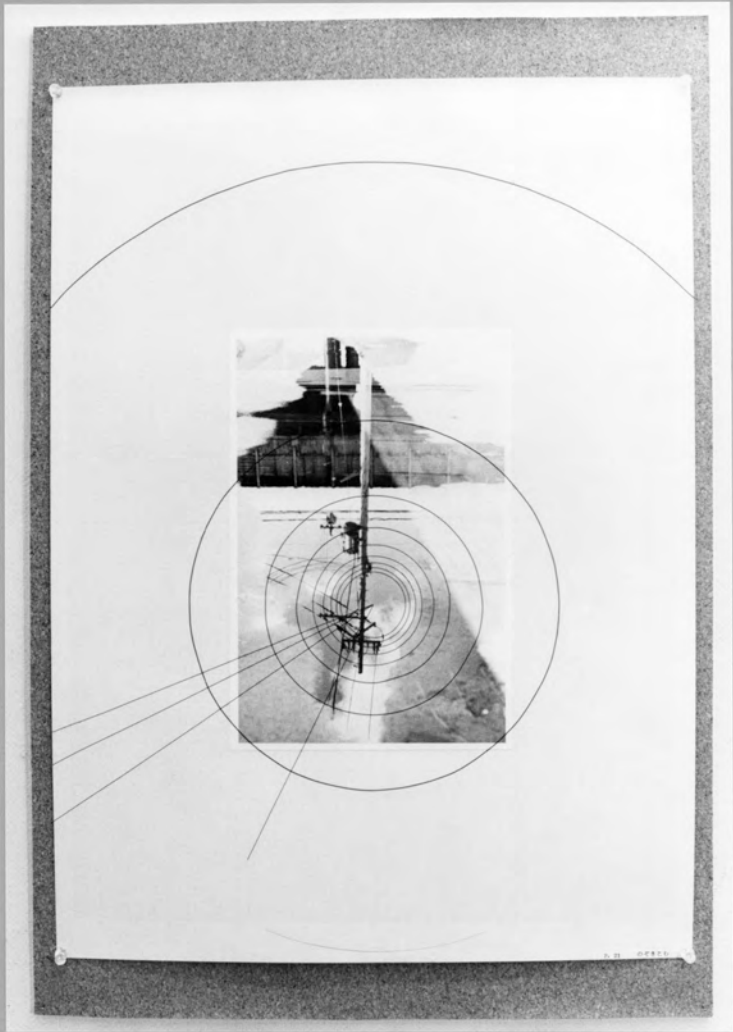


P. 19 <表面 / . . . > (photo)



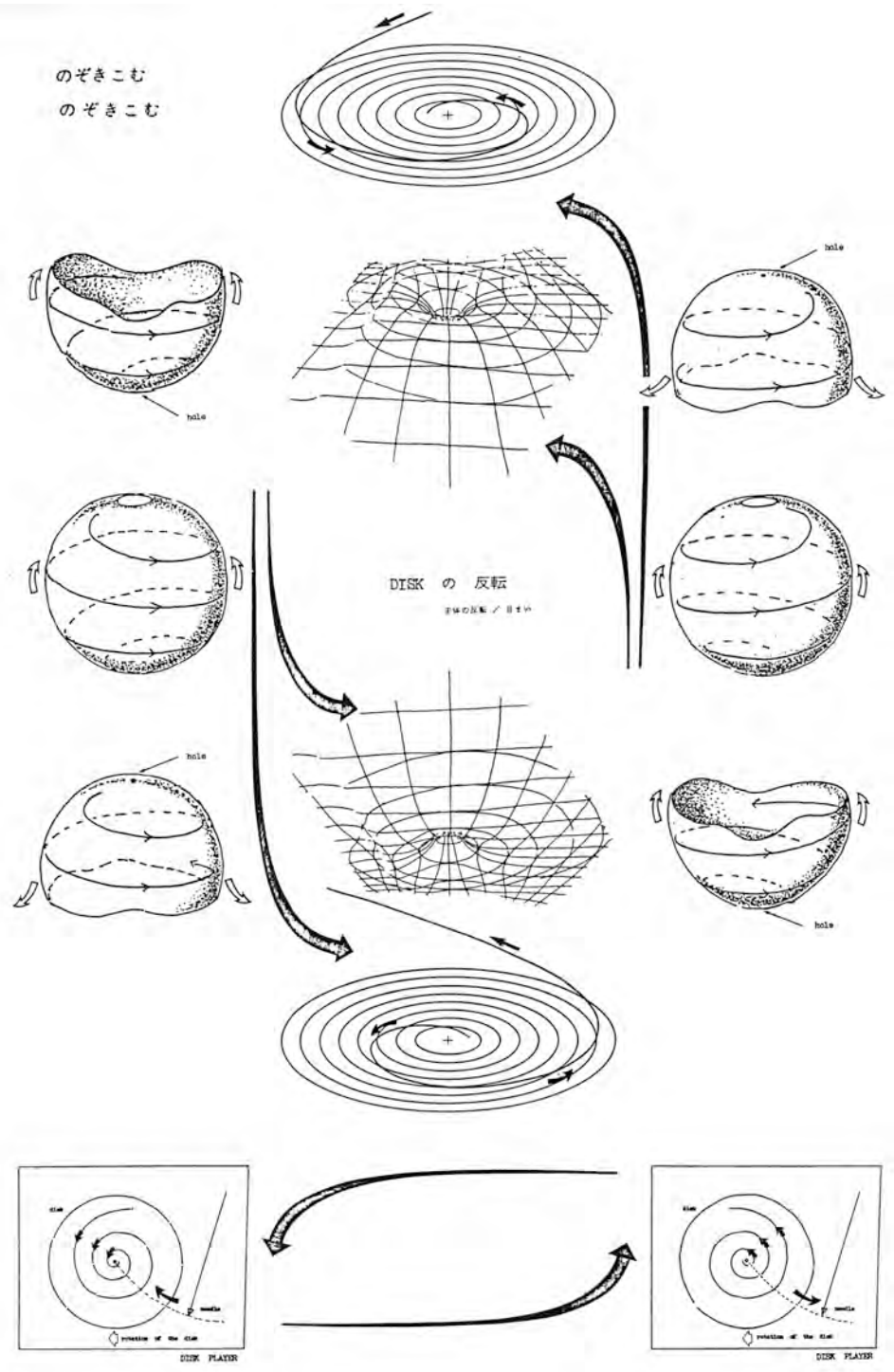
＜ 表面 ＞



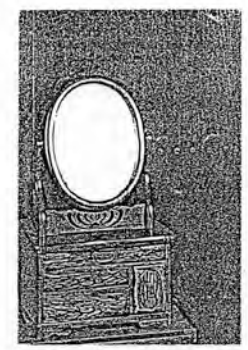
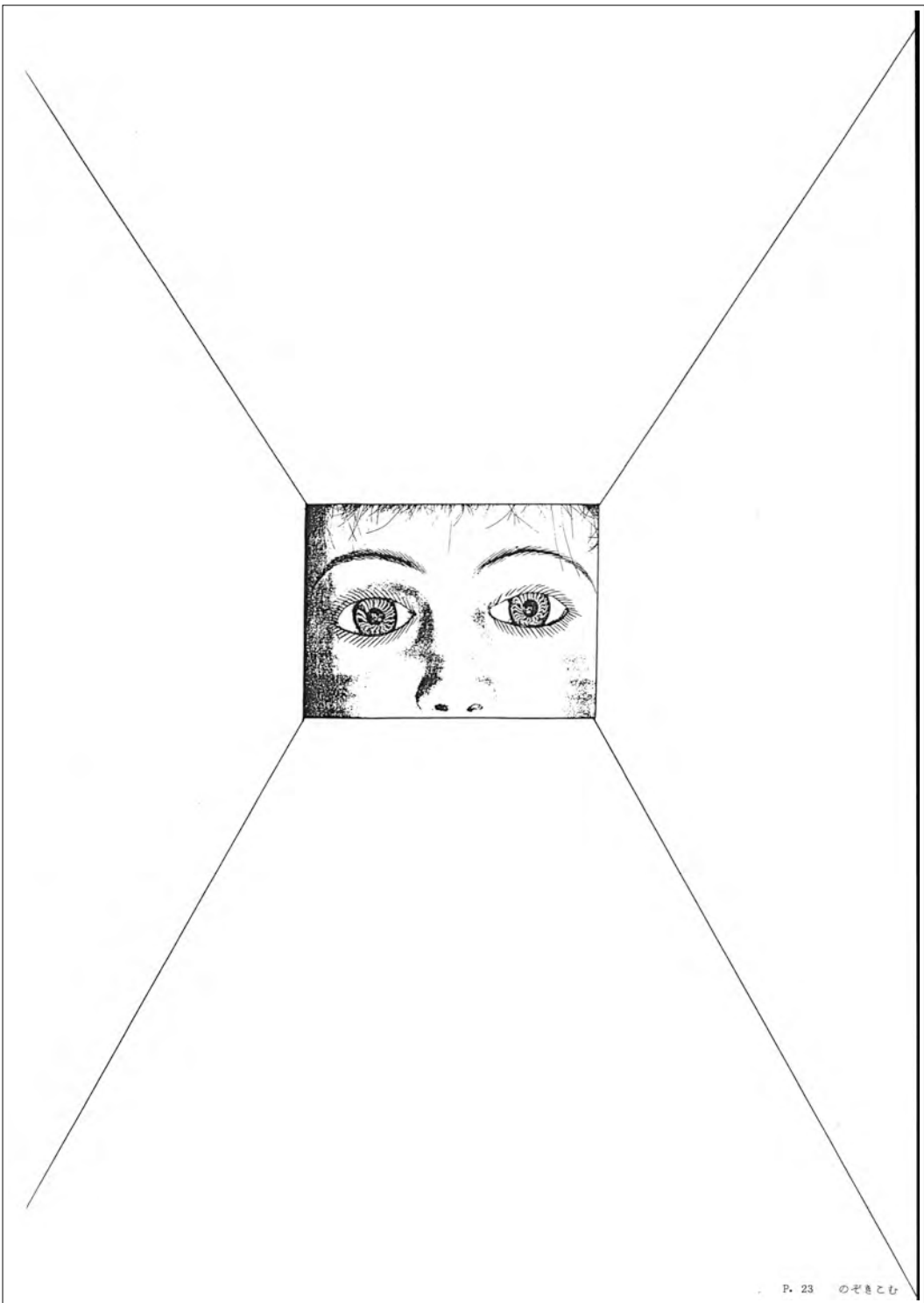


P. 21 のぞきこむ (photo)

のぞきこむ  
のぞきこむ



P. 22 のぞきこむ

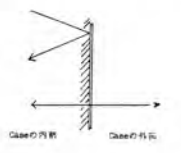


「誰……? それは誰なのかしら? ……  
 ……いまだかつて 誰のものも、その目に  
 映し出されたことはない。  
 誰のものも映さぬ鏡……それは誰のもの?  
 ……誰にも映さぬ鏡の姿が見えるのか?」

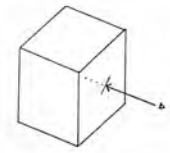
テイレスアスはドイオタイアの騒都市で非常な名声を博し、平首を求める人びとに  
 あやまりのない返答を与っていた。彼の言葉の真実性と確かさを最初に立証したの  
 は、青い水に住むニンフ・レイリオベだった。  
 ある時、阿神クビソスが うねった流れに少女を巻きこみ、水の中に閉じこめて現  
 界を離れた。美しいこのニンフは、月みちて男の子を生んだ。幼いながらもニンフ  
 たちに愛されるほど可愛らしいこの子は、ナルキッソスと名づけられた。  
 この子が、老年まで生きながらえることができるかどうかをたずねられて、テイ  
 レシアスは答えた。「うん、みずからをのぞきこむことがなければな。」

ナルキッソスの神話がすぐれて映象=自我の経験に関わるものであることは論を俟たない  
 ブランショは、以前語った「<鏡>像の二つの形体」(『文学空間』1999年)  
 のうちの一つをそこに見る。それは自己解体的なはたつきである。  
 すなわち「人間 (はたしてそれは人間か?) は、みずから<sup>イマージュ</sup>によって形作られるに  
 せよ、よりいっそう確実にみずからの像によって解体される危険にさらされている」の  
 である。  
 「ナルキッソスが自己を再認しないのは彼の見るものがイマージュだからである。イマージュ  
 は実在の何ものにも通り返さず、何ものにも「出て」もいない。そしてナルキッソスがそれに  
 出会うのは、あらゆるイマージュが誘引力をそなえているから、空虚と死との誘引力がか  
 らである。」

⑥鏡のGAGG MIRRORによって作られたCase



Caseの内側 Caseの外側



のぞきこむことの禁止

のぞきこむ ……誘引力の鏡内に自らを投げつけられること、あるいは、奪きこまれ

“のぞきこむさ”という禁止の言葉は常に吐かれてある。  
 私の内部に、あるいは外部に、いたるところに響かされてある言葉。“……さ”  
 しかし、“のぞきこむさ”という禁止の言葉によって始めて、私は“のぞきこむ”に  
 用いよう自らの姿を見出し出したかった。  
 禁止されてあるのは、“のぞきこむ”現象ではなく、“のぞきこむ”という、ひとつ  
 の姿勢、そこ自身を置くことではないだろうか。

“のぞきこむてはならない”という禁止の言葉は常に吐かれている。  
 しかし、決して、のぞきこまれる対象といえるものがあるのだろうか。……そこには  
 何もない……何もなからぬ。のぞきこむ、ことは、禁止されているのではな  
 いか……何故なら、のぞきこむとは「禁止」の「動名」として「能」と共に  
 「禁止」をもも、無化してしまうからに物さらない。

のぞきこむ、ことに触れられた老練の男……  
 ……「モイゼソンの鏡」に誘われる数多くの観衆を導いた……

誘引力 みちやく

主体の喪失



八日。雨。

この時間 テニスコートに人影はない。

あなたはいつものように わたしの左横で 灰色のノートを書き続けている。見ようとは思わないけれど そのノートの裏面には わたしがあなたに向けて書くことばのすべてが 書き留められているのだろう。 ひとつも もらさず・・・わたしのことばが・・・  
・・・すべて・・・

(けれど 声にならない こんなわたしの書きささも あなたにノートに書かれいくとしたら・・・)

いつのまにか わたしはあなたに話しかけている。

-----読んでいるのは わたしなのかしら？

-----何を読んでいるの？

-----テニスコートだと思ふ。 そこには 誰もいないの。 テニスをする人も観客も 誰ひとりとしてはいないの。

-----誰もいないテニスコート？ 誰もいないテニスコートをあなたは読んでいるんだね？

-----誰もいないテニスコートをわたしは・・・いいえ そうじゃないわ。

「わたしは誰もいないテニスコートを読んでいる。」なんて何故わたしに言えるというの。

-----ああ あなたは 「わたしは読んでいる。」とは言えないんだね。 「わたしは・・・」と言った油断 あなたはいてしまう。誰もいないテニスコートには 読めるあなたさえてはならないのに・・・。 じゃ 彼女の事を話してくれるかい？ それなら あなたにも話せるだろう？

-----ええ 誰もいないテニスコートを読んでいる彼女の事ね？

-----ああ あなたが僕に夢の話を聞かせてくれるように。

-----彼女は誰もいないテニスコートを読んでいるの。

-----何か考え事でもしているんだろうか？

-----いいえ 何も。 ただ読んでいるの。 もしも 何かを考え始めたら 彼女はいてしまうわ。

-----誰もいないテニスコートにね。

-----ええ だから彼女は ただ読んでいるだけなの。 きっと考える事ができないのよ。何か心に奪われているの。

-----彼女は何に心を奪われているの？

-----風よ たぶん。

風よ 無に心を奪われて 彼女は読んでいるの。

-----・・・無に心を奪われて 彼女は読んでいる・・・

-----どうして あなたに話しかけることばのなかで 彼女は読め始めているの。

-----それは彼女の？ 読め始めたのは あなたではないの？

-----何故あなたなんて言うの？

-----ああ 誰でもいいんだね。ただ 誰かであってはいけななんだ・・・

-----誰かであってはいけななの

-----でも それなら 彼女の事を話すのがあなた(わたし)であって いけないんだ。夢を語り始めれば 夢の光景を読んでいたのが (わたし)でしかなくなってしまうように・・・。 けれど 僕達はすでに話しかけているんじゃないだろうか？ 誰もいないテニスコートを読んでいる彼女の事を。

-----話している？ いったい 誰が話しているというの？

誰も話してはいなかったんじゃないか？

(あなたは灰色のノートに ひとつももらさず わたしのことばを書き留める。

けれど わたしは そのノートを誰人か事はない。)

・

・

・

読 む

・

無

・

夢 を 読 む

・

誰 が 話 し て い る の ？



島天。

窓は閉まっている。

美空の あなたのいる側からは 顔は見えない。

わたしのほうからは見わたせて わたしは顔を見ている。わたしのテーブルは 窓の縁にくっついている。

光線がまぶしいため わたしは 目に顔をよせている。わたしの視線は往ったり来たりする。ほかの客たちも

あなたは見えないアリスのゲームを見ている。あなたは テーブルを覚えてはしりと申し出はしなかった。

わたしは 見られていることを知らない。

今朝五時頃 雨が降った。

今日は ゴールをたたく音が轟々と響く陶酔しい天候を聴いて響く。わたしは夏服を着ている。

わたしの前には いつもの本が置いている。あなたが来てから読み始めたものか？それとももっと前からか？

本のそばに 白い錠剤のはいった箱が二つある。わたしは来事ごとに錠剤を飲む。

ときどき わたしは本を開ける。

島天。

窓は閉まっている。

美空の 彼のいる側からは 顔は見えない。

彼女のほうからは見わたせて 彼女は顔を見ている。彼女のテーブルは 窓の縁にくっついている。

光線がまぶしいため 彼女は 目に顔をよせている。彼女の視線は往ったり来たりする。ほかの客たちも

彼女は見えないアリスのゲームを見ている。彼女は テーブルを覚えてはしりと申し出はしなかった。

彼女は 見られていることを知らない。

今朝五時頃 雨が降った。

今日は ゴールをたたく音が轟々と響く陶酔しい天候を聴いて響く。彼女は夏服を着ている。

彼女の前には いつもの本が置いている。彼女が来てから読み始めたものか？それとももっと前からか？

本のそばに 白い錠剤のはいった箱が二つある。彼女は来事ごとに錠剤を飲む。

ときどき 彼女は本を開ける。そして ナグまた閉じてしまう。

晴。七日目。

アリスのそばの 白い長椅子に また彼女の顔が見える。ほかにも 白い長椅子が いくつかあり その大半は人が座ってなく 周囲と孤立して 円形に配置され 向い合った扉破船といった風情だ。

彼が彼女を見失うのは午後の後だ。

彼は パルコニーから彼女を見ている。彼女は眠っている。

彼女は背が高く 腰背のところで軽く体を折り曲げれば死んでいるよ

うだ。彼女は扉破船でやせている。

この時間 アリスコートに人影はない。

午後のあいだは アリスをしてはいけなさに変わっているのだ。アリス

は 四時頃に再開され 夕暮れまで行われる。

七日目だ。しかし 基調の麻痺した電音的ななかに よく通る静寂無人

な男の声が響く。返事する者はない。誰と話を言ったのだ。

目をさます者はない。

アリスコート あんなすぐそばにいるのは彼女だけだ。ほかの人たちは

もっと離れて 生徒の陰だとか 障の奥たる芝生などにいる。

今しゃべったばかりの声が 扉破船にこだまとなって反響する。

晴 顔は悪い。

長椅子の上で 彼女が動いた。彼女は寝返りをうち両足を伸ばして閉き

顔探りに 顔を片手で挟んだまま また眠りこんでしまった。

晴。七日目。

アリスのそばの 白い長椅子に またわたしの顔が見える。ほかにも 白い長椅子が いくつかあり その大半は人が座ってなく 周囲と

孤立して 円形に配置され 向い合った扉破船といった風情だ。

あなたがわたしを見失うのは午後の後だ。

あなたは パルコニーからわたしを見ている。わたしは眠っている。

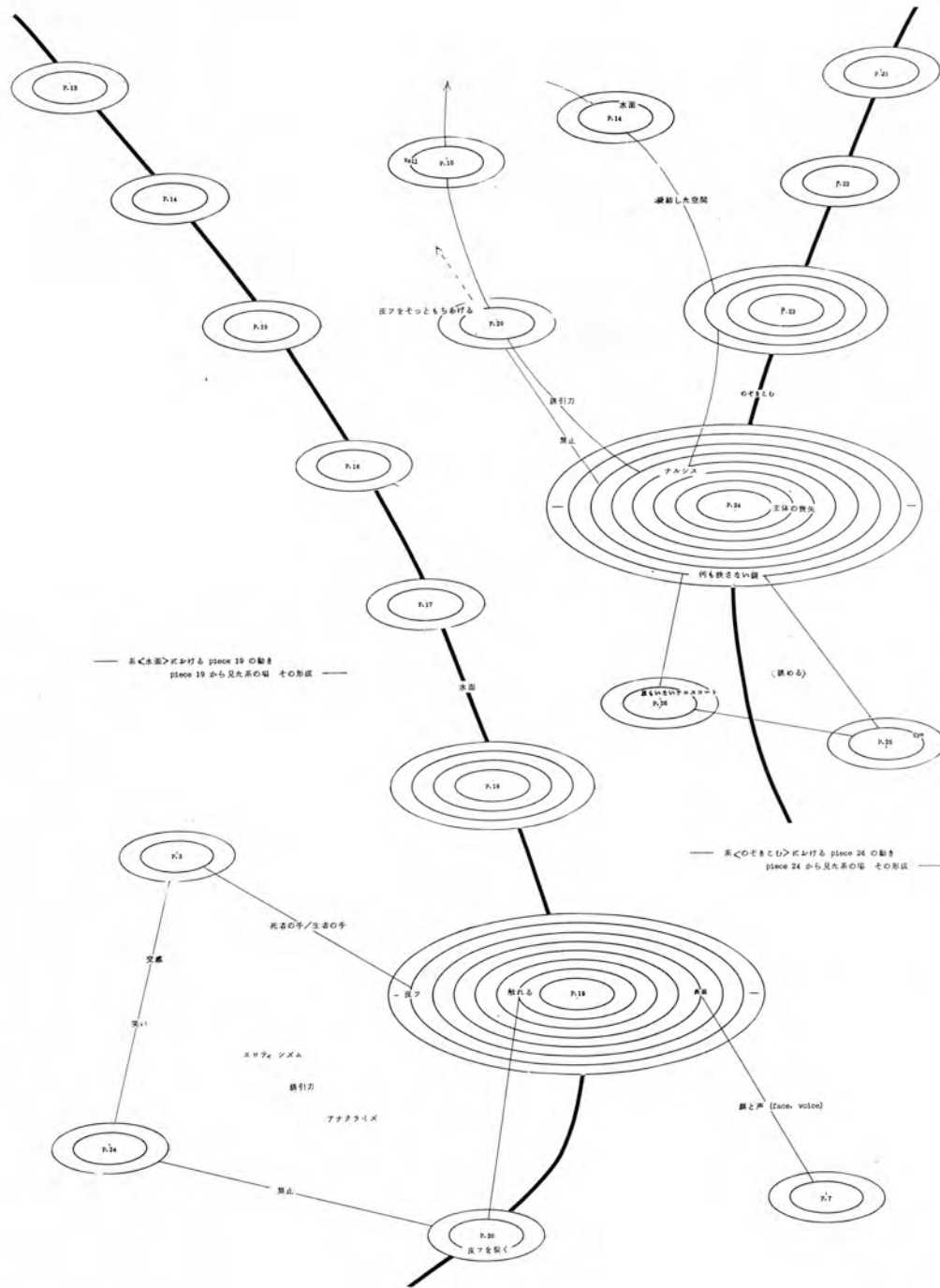
わたしは夢を見ていたらしい。

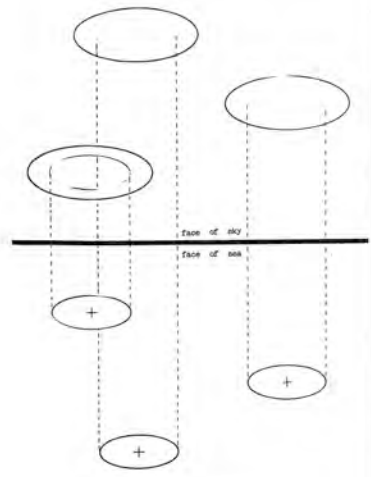
晴 顔は悪い。

長椅子の上で わたしが動いた。わたしは寝返りをうち両足を伸ばして閉き

顔探りに 顔を片手で挟んだまま また眠りこんでしまった。

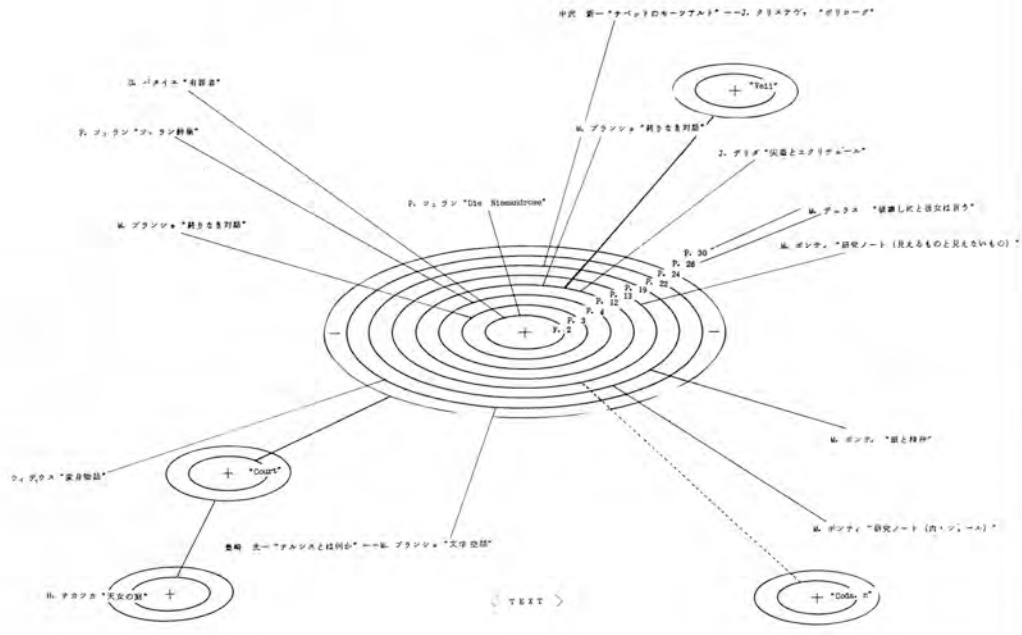
わたしは夢を見ていたらしい。





..... 多数の入口/出口

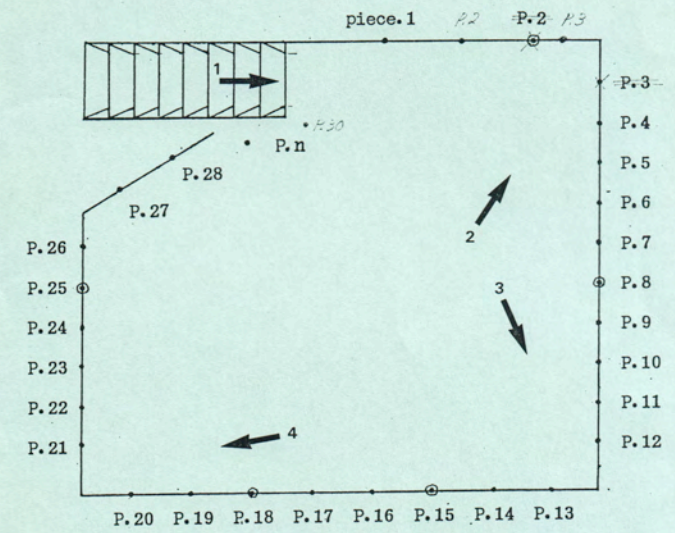
PIECE . . .



1



2



4



3

22

RECORDING  
NUMBER            No. 3

DATE            1955. 9. 20. (TUE) ~ 9. 22. (THU)  
                  (12:00 ~ 1:30)

PLACE            KIYAMACHI GARD  
                  (NYOTO KIYAMACHIDORI SHIJOY AGARU HIGASHI)

SETTING

-----

P.00	P.01	P.02	P.03	P.04	P.05	P.06	P.07	P.08	P.09	P.10
A.00	A.01	A.02	A.03	A.04	A.05	A.06	A.07	A.08	A.09	A.10

RECORDED            WAKURO KIKUCHI AND YASUHIKO ANKO

